



ショートコメント

★★★★

Data 2024-17

監督：ブリッツ・バザウレ
製作：オブラ・ウィンフリー
／スティーブ・スビ
ルバーク／スコッ
ト・サンダース／クイ
ンシー・ジョーンズ
原作：アリス・ウォーカー『カ
ラーパープル』

カラーパープル

2023 年／アメリカ映画
配給：ワーナー・ブラザース映画／141 分

2024（令和6）年2月12日鑑賞

TOHO シネマズ西宮 OS

👁️👁️ みどころ

私はミュージカル映画が大好き。また、黒人歌手の素晴らしい歌声も大好きだ。しかし、あまりにも歌のシーンや演技の“作りすぎ感”が強すぎると・・・。

黒人文学の代表は『アンクル・トムの小屋』（1852 年）だが、あれは南北戦争以前のこと。20 世紀も 1920 年代になれば・・・？さらに 30 年代、40 年代を経て第二次世界大戦後になれば・・・？

そう思っている人には、本作は必見！もっとも、主人公の悲惨さを感じれば感じるほど、本作ラストに見る“神の御業（みわざ）”に感謝！アーメン！

—— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * ——

◆本作のチラシには、「スティーブ・スビルバーク監督の伝説の名作が世界最高峰の才能によってミュージカル映画として新たに誕生！」の文字が躍っている。同作の公開は 1985 年だが、他方で「1985 年に公開されたオリジナル版は、黒人の世界をきちんと描いていないという声、賞狙いで撮影したという声があがり、無冠に終わったものの、作品自体のあまりの素晴らしさにアカデミー賞 10 部門 11 ノミネートされた“衝撃の名作”として、映画史に刻み込まれている。」との情報もあるから、アレレ。

そんな“衝撃の名作”が、なぜか今、ミュージカル映画になり、141 分の長尺で公開された。黒人シンガーの歌声の素晴らしさは多くの映画で実証されているが、本作も第 81 回ゴールデングローブ賞でファンティジア・バリーノとダニエル・ブルックスが W ノミネート！

◆チラシによると、本作のストーリーは次の通りだ。

優しい母を亡くし横暴な父の言いなりとなったセリーは、父の決めた相手と結婚し、自由のない生活を送っていた。さらに、唯一の心の支えだった最愛の妹ネティとも生き別れてしまう。そんな中、セリーは自立した強い女性ソフィアと、歌手になる夢を叶えたシュグと出会う。彼女たちの生き方に心を動かされたセリーは、少しずつ自分を愛し未来を変え

ていこうとする。そして遂に、セリーは家を出る決意をし、運命が大きく動き出す――。

もっと短く、本作のポイントをまとめると、「最愛の妹と、自由を奪われたセリー。運命の出会いが今、彼女を立ち上がらせる。」だ。

本作冒頭、父親に虐待され、10代にして傲慢な白人男ミスター（コールマン・ドミンゴ）との間で望まれ結婚をさせられる主人公セリー（ファンテイジア・バリーノ）が、最愛の妹ネティ（ハリー・ベイリー）と別れていく姿が描かれる。ハリエット・ビーチャー・ストウの小説『アンクル・トムの小屋』（1852年）は最も有名な“黒人文学”だが、あれは南北戦争（1861～1865年）以前のアメリカ南部での、ひどい黒人差別を描いた小説。そう思っていたが、1917年に始まる本作も、冒頭のストーリーを見ていると、ほとんどそれと変わらないからアレレ・・・。

◆ミスターがセリーを嫁にしたのは、妻として愛するためではなく、あくまで労働力として期待したためだ。本作を見ていると、そのことがよくわかる。ところが、他方でミスターは、自由奔放で天真爛漫な性格の黒人歌手シュグ（タラジ・P・ヘンソン）にはゾッコン惚れ込んでいるから、アレレ・・・。またミスターの息子のハーボ（コーリー・ホーキンス）も、自らを軽視する男性に怯むことなく立ち向かう強い黒人女性ソフィア（ダニエル・ブルックス）に惚れ込み、「結婚したい」と父親に迫るから、アレレ。

器量の良い妹のネティと違って、ブサイクな姉のセリーは、虐待されながらも夫の言いなりになって働くしか能がないと思われていたが、シュグやソフィアのたくましい生き方を身近に見せつけられていくと、セリーの自立心は・・・？さらに、“数奇な運命”の中でアフリカに移住したネティが、毎週のようにセリーに送っていた手紙を、ミスターがすべてセリーに見せず隠していたことを知ると、その怒りは・・・？

◆私はミュージカル映画が大好きだが、本作の歌のシーンはあまりにも“作りすぎ”感が強い。また、黒人特有のオーバーアクションも目立ちすぎる。さらに、時代が1930年代、40年代と進み、第二次世界大戦終了後も、相変わらずの人气が続いているシュグが豪華な家に住み、豪華な車を乗り回している姿を見ると、そんな中でのミスターの妻としてのセリーの悲惨な姿が、「これは現実？」と思えてしまう。しかし、張芸謀（チャン・イーモウ）監督の『活きる』（94年）（『シネマ2』25頁、『シネマ5』111頁）で描かれていたように、人生は「禍福は糾える縄の如し」だ。また、株の格言で言う通り、「山高ければ谷深し」だが、逆に「谷深ければ山高し」だ。

本作ラストにはアフリカから戻ってきたネティと再会できるだけでなく、セリーは生まれてすぐに奪われてしまっていた息子を含めて、素晴らしい家族の再結集ができるので、私はセリーと共に、神の御業（みわざ）に感謝！神は偉大なり！アーメン！

2024（令和6）年2月14日記